

# 多次元的社会学の論理と多元的社会

## ——ジェフリー・アレクサンダー『社会学理論の論理』

### 刊行40周年を記念して——

鈴木 健之

はじめに

ジェフリー・C・アレクサンダー (Jeffrey C. Alexander) は、1978年、『アメリカ社会学評論』 (*American Sociological Review* [以下 ASA と略記]) に「タルコット・パーソンズの著作における形式的主意主義と実質的主意主義：理論的並びにイデオロギー的再解釈」 (Alexander 1978) を発表し、〈パーソンズ・ルネッサンス〉の立役者となった。この論文は1978年にカリフォルニア大学バークレー校に提出した大部な博士論文、『社会学理論の論理』 (*Theoretical Logic in Sociology* [以下 TLS と略記]) を圧縮・短縮したものである。1970年代、アンチパーソンズの時代のアメリカ社会学において、おそらくただ一人、アレクサンダーは、パーソンズの著作とパーソンズ批判を行っている著作のほぼすべてを読み、理論的 (形式的) にもイデオロギー的 (実質的) にもパーソンズ理論が有効なものであることを明らかにしたのである。

ハーヴァード大学の孫弟子にあたるアレクサンダーのこの博士論文の完成を心待ちにしていたのが、かのパーソンズであった。ハーヴァードを離れて、カリフォルニア大学バークレー校にやってきたアレクサンダーは、パーソンズとの往復書簡という形で博士論文の指導を仰いでいた。博士論文の提出、『ASA』へのその骨子の掲載、そしてパーソンズの最後の著作『行為理論と人間の条件』<sup>(1)</sup>の出版が1978年であり、折しもカリフォルニアでは同性愛者解放運動が大きな盛り上がりを見せていた年でもあった。こうしてアレクサンダーのアメリカ社会学界デビューを見届けたパーソンズは、1979年5月、ミュンヘンで客死した。

1978年、カリフォルニア大学バークレー校より社会学博士号を取得。それから4年経った1982年、大部な博士論文に更なる加筆が行われた『TSL』の刊行が始まった。第1巻が「総論」、第2巻が「マルクス論・デュルケム論」、第3巻が「ウェーバー論」、第4巻が「パーソンズ論」。全4巻が出そろったのは1983年であった。経験的志向の強いアメリカ社会学 (界) において『TLS』はきわめて異色な本である。第1にとっても長く、第2にとっても大きく、第3にとっても理論的である。アメリカ社会学において、これほどまでに長く、大きく、理論的な研究は、タルコット・パーソンズの『社会的行為の構造』(1937) 以来とってよく、おそ

らく今後アメリカ社会学においてこうした大部な著作が出版されることはないであろう<sup>(2)</sup>。

本稿では、『TLS』刊行40周年を記念して、アレクサンダー社会学とは何であったのか、その総括を試みたい。けれどもアレクサンダー社会学はとても長く、大きく、理論的である。ここでは、ひとつの理論やひとつの社会を絶対化することなく、たえず社会学理論を多次元的に構成し、そして〈いまここ〉にある社会を多面的にみるための、「社会学理論の論理」(theoretical logic in sociology)がどのような知識社会的背景から現れてきたのかという点に限って論じていく。別稿(鈴木 2020c)で論じたとおり、アレクサンダー社会学は、「ASA」論文、『TLS』に始まり、最近の議論に至るまで、「理論の相対化」と「社会の相対化」という〈二重の相対化〉に絶えず志向するものであり、その理論的営為は今もなお精力的に続けられているからだ。

本稿では、第1に、「カリフォルニア大学バークレー校時代のアレクサンダーと社会学理論」について論じる。「マルクス主義者」から「パーソンズ主義者」への転向がいかにして起こったかを明らかにする。マルクス主義が教条化し絶対化されるとき、アレクサンダーがそこで見たものは、「暴力」と「死」であり、そこには「絶望」しかなかった。第2に「カリフォルニア大学ロサンゼルス校時代のアレクサンダーと社会学理論」について論じる。「構造主義者」から「行為論者」への転向がいかにして起こり、行為システム論(ミクロ・ミクロ・リンク)の展開がどのようになされていったかを明らかにする。エスノメソドロロジーの〈中心〉であるUCLAにやってきて、かのガーフィンケルと同僚となったアレクサンダーは、ここでもまた、エスノメソドロロジーとシンボリック相互行為論の著作を徹底的に読みつくしたのであった。本論では、1978年から98年までのアレクサンダー社会学を論じることにしたい<sup>(3)</sup>。

## 1. カリフォルニア大学バークレー校時代のアレクサンダーと社会学理論

わたしが1969年にバークレーに来たとき、新入生のうちわたしだけ経済的な援助が一切受けられませんでした。というのも学部時代の成績が悪かったためです。実際、わたしは入学を許可されただけでも幸運でした。バークレーでの最初の2年間は、真のマルクス主義の知識人になることをめざし、授業から、それ以上にフレッド・ブロックと当時『社会主義革命』と呼ばれていた雑誌(後の『社会主義評論』)から多くを学びました。しかし、わたしの政治(ポリティクス)が革命的なものから社会民主主義的なもの(そして最終的にはリベラル左派)へと移行するにつれ、実はバークレー時代の最初の数年間にいくつかの重要な知的エピソードを体験していたことにあとで気がつきました。それは、ニール・スメルサー<sup>(4)</sup>、ロバート・ベラー<sup>(5)</sup>、レオ・ルーヴェンタール<sup>(6)</sup>の講座です。

わたしは、この3人に何とかお願いして、大部な学位論文の執筆において指導を仰ぎ、その審査をしていただきましたが、博士論文完成後の4年間でさらに大部なものになってしまいました。それ以来、スメルサーとベラーとは密接に連絡を取り合っています (Alexander 2003=URL1)。

40年前は「パーソンズ2世」(Parsons, Jr.)、30年前からは「デュルケム派」(Durkheimian)、20年前からは「文化社会学者」(cultural sociologist)と呼ばれ(「パーソンズ2世」よりほかは今現在も自認している)、そして今やアメリカ社会学の有力な研究拠点の一つとなった「イェール大学文化社会学センター」(Center for Cultural Sociology)の創設者であるアレクサンダー。その彼の第一の理論的基礎(土台)は、デュルケムでもなく、ヴェーバーでもなく、パーソンズでもなく、マルクスであった。ハーヴァード学部学生時代のアレクサンダーはまさしく活動家(activist)であった。彼の生年は1947年<sup>(7)</sup>。当時の他の多くの学生と同様に、アレクサンダーはマルクス主義を信奉し、社会主義革命をめざしていた。彼のハーヴァード大学の卒業論文のテーマは、マルクス主義からみたアメリカにおける労働運動史であったという。ハーヴァード大学を「優秀な成績」<sup>(8)</sup>で卒業したアレクサンダーは、1969年、学生運動の中心地のひとつでもあったカリフォルニア大学バークレー校大学院社会学専攻に進学するべく、東から西へと飛んだ。

こうして、UCB 大学院社会学専攻修士課程に進学したアレクサンダーは、同期で同年のフレッド・ブロック<sup>(9)</sup>とともに、今度は本気で「真のマルクス主義の知識人」になることをめざした。けれども、〈激動の1968年〉以後のアメリカ社会の現実を目の当たりにしたアレクサンダーは、それまで信奉していたマルクス主義に対して懐疑的になっていった。1968年を頂点として、マルクス主義の旗印の下、全世界的な学生運動が展開されたが、その結末たるや、セクト間の対立・抗争が激化するばかりであり、プロレタリアートを連帯させるはずのマルクス主義が肅清を旨とする〈死へのイデオロギー〉<sup>(10)</sup>に転化していったからだ。アレクサンダーがそこで見たものは、〈マルクス・イズム〉の絶対化であり、その帰結としての抗争・排除・暴力・死であった。マルクス主義の呪縛から解放されるべく、アレクサンダーが向かったところは、古典社会(学)理論の徹底的な講読であった。

つまり、わたしのバークレー時代は、古典および新左翼マルクス主義の文化から出発し、そこから古典および近代のより厳密な社会学の領域へと移行する、高度な理論の強烈な教育というものだったのです。まさしくこの経験こそ、わたしを形成し、その後のわたしの学問的人生において「主流」の社会学からわたしを引き離すものになったのでした (Alexander 2003=URL1)。

博士課程進学後のアレクサンダーは、実践よりもむしろ理論に重点をおき、ベラー、スメ

ルサー、そしてルーヴェンタールの下で、徹底的に社会（学）理論の古典を読むことをとおして、マルクス主義の呪縛から解放されていく。ベラー、スメルサー、そしてルーヴェンタールは「より大きな平等を求めて」という意味においてマルクス主義者ではあったが、教条主義的なマルクス主義者ではなく、〈マルクス・イズム〉に囚われてはいなかった。ベラーとスメルサーはマルクス主義者であるとともにパーソンズ主義者であったが、教条主義的なパーソンズ主義者ではなく、〈パーソンズ・イズム〉に囚われてはいなかった。一方のフランクフルト学派第一世代のアメリカ亡命知識人のルーヴェンタールは、何よりもアメリカ社会学の二つの伝統、ハーヴァード社会学にもシカゴ社会学にも囚われていなかった。そして、ルーヴェンタールの批判理論は教条主義的なマルクス主義を相対化するものであり、ひいてはアメリカ社会学をも相対化するものであった。アレクサンダーは、ベラーとスメルサーをとおしてパーソンズを、ベラーをとおしてデュルケムを、スメルサーとルーヴェンタールをとおしてマルクスを、批判的かつ徹底的に読んでいった。

アレクサンダーがこうしてたどり着いたところは、膨大なマルクスの著作とマルクス研究、膨大なデュルケムの著作とデュルケム研究、膨大なウェーバーの著作とウェーバー研究、そして、膨大なパーソンズの著作とパーソンズ研究であった。とりわけパーソンズ社会学は、ベラー、スメルサー、そしてアレクサンダーにとって、「チャーター」と呼ぶべきものであり、ひとつの理論やひとつの思想の絶対化を越えて、普遍的・総合的な理論（一般理論・統合理論）へ、そして自由と平等と友愛（連帯）という普遍主義的価値を前提とした規範理論へと導くものであった。ベラーはアメリカ社会を一つにまとめあげる価値を「市民宗教」（civil religion）として論じていた。スメルサーは普遍主義的（ユニバーサリスティック）な価値をめざす限りにおいて個別主義的（パティキュラリスティック）な社会運動が正当化されるという社会運動論を展開していた。そしてアレクサンダーは、パーソンズの徹底的な講読をとおして、ベラーとスメルサーの議論をリンクさせるかたちで「新しい市民社会」（new civil society）論（後に「文化社会学」（cultural sociology）との関連において議論される「市民圏」（civil sphere）論）を展開していくことになる（鈴木 2018）。

こうして1983年、『TLS』全4巻が完成した。まずは、最も形而上学的な理論の環境である「一般的理論前提」（general presuppositions）から最も経験的な理論の環境である「観察」（observations）に至るまで社会学理論の座標軸を段階的に設定し、パーソンズ以後の（1960年代以降のアンチパーソンズ時代の）アメリカ社会学における理論の対立と理論論争を整理しつつ、「対立」から「対話」へと導く多次元的社会学理論の論理が示される<sup>(11)</sup>。次に、「一般的理論前提」の水準における理論論争（唯物論・観念論、社会実在論・社会唯名論）が行為と秩序問題として捉えなおされ、まずは、唯物論的伝統（マルクスとマルクス主義：第2巻

前半「マルクス論」と観念論的伝統（デュルケムとデュルケム主義：第2巻後半「デュルケム論」）の対立と交差が議論される。次に、唯物論的伝統と観念論的伝統の古典的な統合の試み（ウェーバーとウェーバー主義：第3巻ウェーバー論）が議論される。そして両伝統の現代的な再構成の試み（パーソンズとパーソンズ主義：第4巻パーソンズ論）が議論されている。

アレクサンダーが『TLS』においてこうした古典の徹底講読をとおして主張したかったことは、①〈いまここ〉の社会の〈過去〉、〈現在〉、〈未来〉は、ひとつの社会（学）理論によってでは適切に論じることができないということ。②〈いまここ〉の社会を適切に論じるためには、さまざまな理論の〈対話〉と〈リンク〉を可能にする「理論のコミュニティ」（theoretical community [ゲールドナー]）の創出と「社会学理論の論理的再構成」（the reconstruction of theoretical logic in sociology）が行われねばならないということであった。こうしてアレクサンダーは、『TLS』において、社会学理論化（sociological theorizing）の水準を「科学の座標軸」として再構成し、パーソンズによって再構成された社会学理論の論理に基づいて、理論の絶対化に対して絶えず反省的（リフレキシヴ）な相対化を行っていったのである（鈴木 1997）。

## 2. カリフォルニア大学ロサンゼルス校時代のアレクサンダーと社会学理論

バークレー校を去った後、わたしはUCLAで助教授から教授までの25年間を過ごしました。そこでわたしは多くの理論を発表し、いくつかの知的な運動を始めようと試み、そこで栄えたミクロ社会学から当初は多くのことを学ぶと同時に、長年の管理業務を通じて、社会学の学問分野ではより優れた、そして間違いなく最もバランスのとれた社会学科を創りあげることに尽力しました（Alexander 2003=URL1）。

1978年、ジェフリー・アレクサンダーは、カリフォルニア大学バークレー校に博士論文「社会学理論の論理」を提出し、社会学博士号を取得した。その4年前の1974年にすでに、アレクサンダーは、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）社会学科に講師のポストを得て教職に就いていた。アレクサンダー27歳の時である。そこでアレクサンダーが出会ったのがエスノメソドロロジーの唱道者、ハロルド・ガーフィンケルである。彼の回顧によれば、当時のUCLAはすでにエスノメソドロロジーの〈中心〉だったという。ガーフィンケルは、ハーヴァード大学でパーソンズを師として仰ぎつつも、その後ニューヨークの「ニュースクール・フォー・ソーシャルリサーチ」でA・シュッツの下で学んだ後、パーソンズ主義と決別し、シュッツの〈一次構成体〉の議論よろしく、「観察者視点」＝〈二次構築体〉ではなく、「生

活者視点」の日常性に根差した社会学＝人びとの社会学（好井 2006）＝〈エスノメソドロジー〉を展開していた。

パーソンズの社会学思想は決して保守主義的なものではなかった。しかし、パーソンズの社会学理論はまさしく「パーソンズ主義」そのものであり、その「理論中心主義」は、彼の初期の議論から一貫して分析的であり、一般的であり、抽象的であった。これに対して、ガーフィンケルは、パーソンズが「これは社会学の研究対象ではない」として切り捨てた〈いまここ〉の具体的な日常生活、人びとの〈生〉＝〈ライフ〉こそが社会学の出発点であり、「あたりまえの日常」からはじめて、まずはそれを追認し、次に疑い、そして徹底的に記述していくといういまだかつてない社会学、エスノメソドロジーを提唱し展開したのであった。パーソンズとは対照的に、エスノメソドロジーは、特定のであり、具体的であり、そして根柢を問うという意味でラディカルであった。

これに対して、アレクサンダーは、現象学的社会学よりもむしろエスノメソドロジーの理論的かつ実践的な意義を認めながらも、まずはマイクロ社会学がマクロ社会学的基礎を暗黙の前提にしていることを理論的に明らかにしようとしていた。それと同時に、アレクサンダーは、マクロ社会学がマイクロ社会学の実践によってはじめて理論的革新が起こりうることも明らかにしようとしていた。UCLA 時代のアレクサンダーは、ここ UCLA において、ガーフィンケルのエスノメソドロジーという新しい社会学の運動に圧倒されつつも、それとは対照的な「ネオ機能主義」を唱道し、ポストパーソンズ派の社会学理論を展開していくのである。<sup>(12)</sup>

この時代のアレクサンダーは、エスノメソドロジーの理論的・実践的意義を十分に認めながらも、人びとの生きられる世界（日常生活）を生活者の視点で議論することが社会学の本懐であるとは考えてはいなかった。UCLA にやってきた後に『TLS』が出版されたが、エスノメソドロジーのインパクトに圧倒されつつも、依然としてアレクサンダーの理論的立場は規範主義的なマクロ社会学であり、そして〈いまここ〉へのパースペクティブは「生活者（生きられる人びと）・当事者」のパースペクティブではなく、「観察者」のパースペクティブであった。<sup>(13)</sup>

アレクサンダーの理論展開において、「観察者」のパースペクティブは一貫として把持されている。けれどもシンボリック相互行為論の新たな中心 UCB（そこには H・ブルーマーがいた）とエスノメソドロジーの中心 UCLA、そのふたつの地において、そしてかれらとの知的交流のなかから、アレクサンダーが自らのマクロ社会学をマイクロ社会学（者）との理論的かつ経験的対話において（十分ではないかもしれないが）一定程度相対化できていたことは間違いないだろう。アレクサンダーが「新しい市民社会」論を展開しようとするとき、社会運動の主体を具体的に描いていくにはエスノメソドロジーとシンボリック相互行為論の方法が



必要不可欠であった。また、アメリカを一つにまとめ上げるシンボリック的存在としてアメリカ大統領を、また、大統領選挙というドラマが繰り広げられるメディア空間における〈パフォーマー〉（大統領候補者）と〈オーディエンス〉（有権者）との相互行為、大統領選挙の〈ドラマツルギー〉を描き出そうとするとき、シンボリック相互行為論＝ゴフマンのコンセプトを積極的に用いていったからだ（鈴木 2019, 2020b<sup>(14)</sup>）。

こうしてアレクサンダーは、UCLA 社会学科のマクロ社会学の陣営にいたのであるが、その後、〈いまここ〉の〈わたしたち〉にとっての切実な問題を論じようとするときに、彼は〈ミクロ〉社会学に旋回する。そして〈いまここ〉の〈人びと〉にとっての切実な問題としての〈レイス問題〉、〈ジェンダー問題〉、〈セクシュアリティ問題〉、〈レリジョン問題〉を論じようとするときに、「実践」をととしたミクロ社会学からマクロ社会学への理路がアレクサンダーによって示されていく。その理論的かつ歴史的議論の集成が『市民圏』（Alexander 2006）であった。

## 結 語

このように、「バークレー」は、70年代初頭にわたしの大学院生活を形作った「反資本主義」（アンチキャピタリズム）や「公的知識人主義」（パブリックインテレクチュアリズム）といった「主義」（ノーション）から離れたとはいえ、その後のわたしの人生を形成し続けているのです。バークレーは、政治的、倫理的、歴史的、そして何よりも理論的な問いに対して熱く燃えあがったところでした。それは、わたしに忘れることができない印象を与え、今日そしてこれからもわたしの仕事と知的アイデンティティに影響を与え続けていくことでしょう（Alexander 2003=URL1）。

1969年、ハーヴァード大学からカリフォルニア大学バークレー校大学院へ。1974年、カリフォルニア大学バークレー校からカリフォルニア大学ロサンゼルス校へ。そして、2001年カリフォルニア大学ロサンゼルス校からイエール大学へ。アレクサンダーの〈生きられる世界〉は変わっていった。

学生運動での挫折により、アレクサンダーが陥った〈アノミー〉。その時、精神安定剤代わりに読みまくったというパーソンズの著作。しかしかつてのパーソンズ主義者もいまや「パーソンズ2世」と呼ばれることをいとう。エスノメソドロジーやシンボリック相互行為論への還元論法的な議論に対して一貫して批判的であったアレクサンダーではあるが、UCLA では自らのマクロ社会学にミクロ社会学を組み込むことで行為システム論を再構成していった。

そして、アレクサンダーの〈いまここ〉において、アレクサンダー社会学はさらに進化しつつ深化している。けれども、そのアレクサンダー社会学において不変の理論的基礎となっ

ているのは、C・ライト・ミルズの「ラディカル」社会学とA・W・グールドナーの「リフレキシヴ」社会学よろしく、〈正〉→〈反〉→〈合〉の「弁証法的」な理論構成と社会発展という議論の出発点としての「マルクス」、遡って「ヘーゲル」なのだ。アレクサンダー社会学において〈理論と社会の二重の相対化〉は、UCB 時代、UCLA 時代、そしてイエール時代、どの時代においても繰り返し行われている。

2023年、『TLS』全4巻刊行から40年。今こその大著の理論的意味と意義がラディカルに議論されねばならないだろう。

## 注

- (1) 筆者がUCLA 留学中(1992-1993)、ジェフとの「個別指導」(individual studies)において、パーソンズから贈られたとしてジェフがとてもうれしそうに見せてくれた『人間の条件』には、タルコットからジェフへの献辞とサインが添えられていた。
- (2) ジェフリー・アレクサンダーの『TLS』は以下のとおりの構成になっている。
  - 第1巻「実証主義、理論前提、現代の諸論争」
  - 第2巻「古典思想の二律背反：マルクスとデュルケム」
  - 第3巻「理論的統合の古典的試み：マックス・ウェーバー」
  - 第4巻「古典思想の現代的再構成：タルコット・パーソンズ」
- (3) 第3に、「イエール大学時代のアレクサンダーと社会学理論」について論じられねばならない。「イエール大学文化社会学研究所」を設立し、アレクサンダーが行為論(シンボリック相互行為論とエスノメソドロジー)から「パフォーマティヴィティ」概念を取り出し、「文化の社会学」(sociology of culture)ではなく、「文化(的)社会学」(cultural sociology)によって「アメリカにおける新しい社会運動」、「アメリカ大統領」、そして「文化的トラウマ」をどのように論じていったかを明らかにするという作業が残されている。この点についての詳細なアレクサンダー研究については兼子(2021)を参照されたい。
- (4) ニール・ジョセフ・スメルサー(Neil Joseph Smelser, 1930-2017)：アメリカの社会学者。カリフォルニア大学バークレー校社会学教授名誉教授。アレクサンダーいわく「パーソンズの愛弟子のひとり」。彼の専門分野は、集合行動論、社会学理論、経済社会学、教育社会学、社会変動論、比較社会学等多岐にわたるが、アメリカ社会学において〈経済社会学〉と〈比較社会学〉の基礎を築いたという点で傑出している。経済社会学においては、マルクス経済学と近代経済学のいずれにも造詣が深く、ハーヴァード大学大学院社会関係学専攻時代、英国ケンブリッジ大学留学時に、同大学において行われたパーソンズの「マーシャル・レクチャー」において指摘されたパーソンズの経済社会学の弱点(ケインズ経済学についてのパーソンズの理解不足)を補うべくパーソンズをフルサポートしたのが若きスメルサーであった。こうして出来上がった著作がパーソンズとスメルサーの共著、『経済と社会』であった。余談になるが、筆者がUCLAに留学中、ジェフ・アレクサンダーから真っ先に読むように言われた著作はスメルサーの『産業革命における社会変動——英国綿産業への理論の応用』(1959)の方であり、『経済と社会』ではなかった。パーソンズ、ベラー、スメルサー、そしてアレクサンダーの知的相互関係については、鈴木(2018)を参照されたい。
- (5) ロバート・ベラー(Robert Neelly Bellah, 1927- 2013)：アメリカの社会学者。カリフォルニア大学バークレー校社会学名誉教授。全世界的に有名な宗教社会学者。アレクサンダーいわく「パー



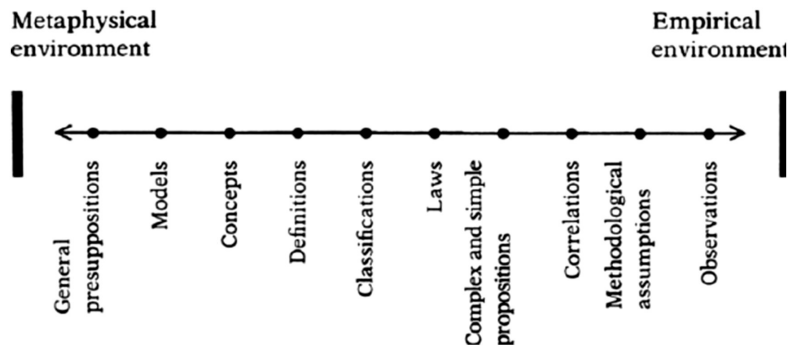
ソンスの愛弟子のひとり」。パーソンズの一番弟子はロバート・K・マートンである。パーソンズはマートンをハーヴァード大学社会関係学科の専任教員に迎え入れるべくさまざまな努力をしたが、ついぞかなわなかった。ベラーは、マートン人事の不成功を反省したパーソンズの尽力によりハーヴァード大学社会関係学科の専任教員となったが、アメリカ共産党員であり、共産主義運動にも関わったことから、マッカーシズムが吹き荒れる当時の〈政治〉の犠牲になり、ハーヴァードを追われることとなった。その後、これまたパーソンズの尽力により、ベラーはハーヴァード大学に復帰するものの、パーソンズが退職した1973年、ハーヴァード大学社会関係学科を去り、カリフォルニア大学バークレー校社会学科に異動した。この辺の事情については、高城（1992）に詳しい。

- (6) レオ・ルーヴェンタール (Leo Löwenthal, 1900-1993) : ドイツの社会哲学者。フランクフルト学派第一世代。アメリカへの亡命知識人の一人。筆者 UCLA 留学中にジェフ・アレクサンダーから、ベラーとスメルサーの名前は頻繁に聞いたが、ルーヴェンタールの名前を聞くことはなかった。それは、アレクサンダーが当時ルーヴェンタールの〈文学の社会学〉に学問的な関心を注いでいなかったという理由からであろう。しかし、アレクサンダーは、ひとつの理論やひとつの社会を絶対化することなく、ユニバーサリティックな社会理論と社会をめざすという点においてフランクフルト学派に強いシンパシーを感じていたことは間違いない。若きアレクサンダーの批判理論的想像力 (critical theoretical imagination) をかき立てた人物こそ、このルーヴェンタールだったのだ。
- (7) 筆者が UCLA 大学院社会学専攻に入学したのが1992年。『TLS』の刊行から10年の時が流れていた。そして92年は折しもアメリカ大統領選挙の年。現職の大統領ジョージ・H・W・ブッシュと民主党の大統領候補ビル・クリントンが激しい選挙戦を繰り広げていた。ジェフのオフィスを訪ねたとき、たまたまこの選挙の話題になり、ジェフはクリントンが一つ年上であり (クリントン: 1946年生、アレクサンダー: 1947年生)、同じベビーブーマーであること、そしてそうであるがゆえにこの若き大統領候補に並々ならぬ期待を寄せていることを語ってくれた。
- (8) 上の引用文に書かれているとおり、ジェフは、UCB 大学院社会学専攻の新入生で奨学金を受けることができなかったのは自分だけ。その理由は学部 (ハーヴァード大学) での成績が悪かったためと言っているが、実はハーヴァード大学社会関係学科を「優等」(cum laude) で卒業している。彼が奨学金を得ることができなかった理由は、彼がハーヴァード出であること。奨学金がなくとも十分に学費等を賄うことができたからというのが本当の理由であろう。
- (9) フレッド・ブロック (Fred L. Block) : カリフォルニア大学デイヴィス校社会学名誉教授。ジェフ・アレクサンダーと UCB 大学院同期生であり同年のフレッド・ブロックは、後にカール・ポランニー研究者としてよく知られるようになる。UCB 大学院社会学専攻博士課程を修了した二人は、かたや UCLA で (ジェフ)、かたや UCD で (フレッド) 社会学のポストを得てからも、そして、ジェフがカリフォルニア州ロサンゼルスを去り、コネチカット州ニューヘヴンに移った後も親交が続いている。
- (10) 「死へのイデオロギー」(Deadly Ideology) は、パトリシア・スタインホフ、岩波文庫版 (2003) のタイトルとして掲げられている。彼女 (1941年生) は1969年にハーヴァード大学大学院社会学専攻博士課程を修了。現在、ハワイ大学マノア校の名誉教授の地位にある。価値 (信仰、信念、信条、イデオロギー等々、英語で、……ism [〇〇イズム]) の絶対化の帰結は、差別、排除、暴力、そして殺人である。スタインホフは、パーソンズのハーヴァード大学大学院社会学専攻博士課程において、〈価値の社会学〉を学び、ロバート・ベラーやニール・スメルサーと同様、規範と価値、そしてパティキュラリズムとユニバーサリズムのそれぞれ二つの水準において「新しい社会運動」を論じていった。連合赤軍を論じた『死へのイデオロギー』は、詳細なボルタージュであると同時に、ハーヴァード大学社会関係学科・大学院社会学専攻

の伝統において、そこで学んだ学生・院生に共有された規範〈主義〉的な、社会運動論として展開されていた点に注目したい。

- (11)「科学の座標軸」(図1)において、アレクサンダーが何よりもまず注目するのが「一般理論前提」の水準での「多次元性」(multidimensionality)である。一般理論前提の水準で、「唯物論」と「観念論」の対立を超えて両者を止揚する理路、そして「社会実在論」と「社会唯名論」の対立を超えて両者を止揚する理路をウェーバー、そしてパーソンズにおいて見て取り、アレクサンダーは多次元的社会学理論化を試みようとした。

「図1 科学の座標軸」



(TLS, Vol.1: 3)

しかし、この科学の座標軸はきわめて「客観主義」的として「主観主義」の理論家から批判されていく。1985年、アイゼンシュタットが編集した『社会学理論のバースペクティブ』にアレクサンダーが寄せた論稿、「現象学と相互行為論における『個人主義のジレンマ』——古典的伝統との統合に向けて」(Alexander 1985)に対して、現象学的社会学者(というよりもエスノメソドロジスト)、相互行為論者(シンボリックインタラクショニスト)らが反発した。かれらは、アレクサンダー社会学には、具体的な「生活者」とその具体的な「日常生活」、あるいは具体的な「相互行為」からの社会学理論化が欠けているとして批判した。言い換えるなら、決定的にアレクサンダーに欠けていたものは、〈いまここ〉のわたし(たち)から始まる社会学(生活者視点[生きられる人びと]の社会学)という理路であった。行為の主観的意味を社会の目的(価値)との関係において理解するアレクサンダーは、デュルケム—パーソンズの伝統の正統な継承者であった。アレクサンダーの立場からすれば、行為の主観的意味を個人行為者の動機との関連において理解しようとする現象学的社会学やエスノメソドロジ、そして個人行為者の「生きられる世界」、「日常生活」、あるいは「具体的な相互行為・コミュニケーション」を記述そこから理論化を試みるフェノメノロジカルソシオロジー、エスノメソドロジ、そしてシンボリックインタラクショニズムは、〈いまここ〉で繰り返されている相互行為秩序しか説明することができないとして却下されてしまう。したがって、アレクサンダーの言う「古典的伝統」において、マルクス、デュルケム、ウェーバー、そしてパーソンズが徹底的に読まれたのに対して、ジンメルは用意周到に議論の対象から外され、ついに徹底的なリーディングは行わなかったのである。

アレクサンダーの「個人主義のジレンマ」論文から、シュッツ—パーソンズ問題を取り出し、行為論の再構成によって社会学理論の再生をめざすべく、1999年に中村文哉と立ち上げたのが「シュッツ—パーソンズ研究会」である。『行為論からみる社会学——危機の時代への問いかけ』

は本研究会の理論的研究成果をまとめたものである（中村・鈴木 2020）。

- (12) アレクサンダーは、UCLA 社会学科では若くして学科長を務め、パーソンズのいう「理論と経験的事実の互酬性」を具体化するべく努力した。アレクサンダーは学科の運営において、理論的研究者と経験的研究者、ミクロ社会学者とマクロ社会学者（その間をつなぐメゾ社会学者）をバランスよく配置したカリキュラムを編成したり、一方でガーフィンケルに代表されるエスノメソドロジーを専門とするミクロ社会学研究者、他方で、マルクス主義社会学、歴史社会学、社会階層論といったマクロ社会学を専門とする社会学研究者、さらには質的社会調査、また量的社会調査を専門とする社会学研究者を国内外からリクルートしたりと UCLA 社会学科を国内的にも国際的にもひじょうに優れた社会学科にしていっていった。UCLA ソシオロジーは、ミクロ社会学とマクロ社会学を理論的・学問的にリンクさせるにとどまらず、カリフォルニア州ロサンゼルスという地において社会学的実践をととして社会学理論を再構成しようとするものであった。その中心にいたのがアレクサンダーだった。

筆者が1992年に UCLA 大学院社会学専攻博士課程に留学した時に社会学科長（1992-95）だったのがハンガリー共産党を批判する『知識人と権力——社会主義における新たな階級の台頭』を書いてハンガリーから追放されたアイヴァン・セレーニ（Iván Szelényi）であった。セレーニを学科長とした1992年のアカデミックスタッフは UCLA 社会学科史上最強・最高と言っても過言ではなかった。1999年、セレーニが UCLA からイエール大学に移った。その2年後、アレクサンダーがセレーニの後を追うかのようにイエール大学に移った。

- (13) アレクサンダー（1985）は、現象学的社会学＝エスノメソドロジーとシンボリック相互行為論が「個人主義のジレンマ」に陥っているとしてマクロ社会学（行為システム論）の立場から両者を批判した。デュルケム－パーソンズのラインで行為の目的の方（規範・価値）に議論していくアレクサンダーからすると、〈現象学〉と〈シンボリック相互行為論〉は日常的な具体的な相互行為しか議論することができない。また行為の主観的（主体的）な意味を強調するあまり、行為の客観的（条件的）な構造について分析できないとして批判される。アレクサンダーの両者への理論的評価は1980年代をととして、そして1990年代になってもその90年代中頃まで変わらなかった。しかし、1990年代後半より、アレクサンダーが〈より大きな平等〉をめざす新しい社会運動の行為主体について、すなわち「新しい市民社会論」を展開し始める時、観察者のパースペクティブから生活者のパースペクティブへの転換が行われる。新しい社会運動としての黒人解放運動（公民権運動）、女性解放運動（第2波フェミニズム運動）、そして同性愛者解放運動（ゲイムーブメント）、そしてアレクサンダー自らが深くコミットしていた学生運動。アレクサンダーのパースペクティブからすると、これらの運動は、個々別々のように見えるが、〈より大きな平等〉をめざす限りにおいて、パティキュラリスティックであること（パティキュラリズム）をやめ、ユニバーサリスティックなもの（ユニバーサリズム）になり、横の連帯を可能にするのである。

- (14) こうしてアレクサンダーは、UCLA 時代、マクロ社会学の陣営にいたのであるが、その後、〈いまここ〉の〈わたし〉（アレクサンダー自身）にとつての切実な問題としての〈ユダヤ人としてのアイデンティティ問題〉を論じようとするときに、彼は〈ミクロ〉社会学に接近する。例えば、アレクサンダーは、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ以後のアメリカ社会について、「社会的トラウマ」概念を用いて論じているが、それと同様に、ユダヤ人のホロコーストも「社会的トラウマ」概念を用いて論じることができるという。アレクサンダー社会学は、こうして、ニュースメディアやメディアイベント等をととして、〈ホロコースト〉や〈311〉が社会的トラウマとしてアメリカの市民に共有されるかざりにおいて、ミクロ社会学のコンセプトを用いている。アレクサンダー社会学は、したがって、生活者の視点でも観察者の視点でもなく、解説者の視点で「文化社会学」（cultural sociology）として展開されていくのである。

## 参考文献・リンク

- Alexander, Jeffrey C., 1978. "Formal and Substantive Voluntarism in the Work of Talcott Parsons: A Theoretical and Ideological Reinterpretation." *American Sociological Review*, 43(2): 177-198.
- Alexander, Jeffrey C., 1982-83. *Theoretical Logic in Sociology*. (4 vols.) Berkeley: University of California Press.
- Alexander Jeffrey C., 1985. "The Individualist Dilemma in Phenomenology and Interactionism: Towards a Synthesis with the Classical Tradition," S. N. Eisenstadt and H. J. Helle, eds., *Perspectives on Sociological Theory*, pp.25-57. Beverly Hills: Sage.
- Alexander, Jeffrey C., 2003a. *The Meaning of Social Life: A Cultural Sociology*. New York: Oxford University Press.
- Alexander, Jeffrey C., 2003b. "Jeffrey Alexander (1978)." <https://sociology.berkeley.edu/jeffrey-alexander-1978> (URL1) 最終閲覧日：2023年1月11日)。
- Alexander, Jeffrey C., 2006. *The Civil Sphere*. New York: Oxford University Press.
- 兼子論 (2021)『市民社会の文化社会学——アレクサンダー市民圏論の検討を中心に』晃洋書房。
- Konrád, György, Széleányi, Iván. 1979. *The Intellectuals on the Road to Class Power: A Sociological Study of the Role of the Intelligentsia in Socialism*. San Diego: Harcourt Brace Jovanovich.
- (『知識人と権力——社会主義における新たな階級の台頭』船橋晴俊・宮原浩二郎・田中康博訳、新曜社、1986年)
- 仲川秀樹編 (2020)『社会学史入門——黎明期から現代的展開まで』ミネルヴァ書房。
- 中村文哉・鈴木健之編 (2020)『行為論からみる社会学——危機の時代への問いかけ』晃洋書房。
- Parsons, Talcott, 1937=1949. *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*. New York: Free Press. (『社会的行為の構造』5分冊、厚東洋輔・稲上毅・溝部明男訳、木鐸社、1974-89年)
- Parsons, Talcott and Neil J. Smelser, 1956. *Economy and Society: A Study in the Integration of Economic and Social Theory*, Glencoe, IL: The Free Press. (『経済と社会——経済学理論と社会学理論の統合についての研究』(I) (II) 富永健一訳、岩波書店、(I) 1958年・(II) 1959年)。
- Smelser, Neil J., 1959. *Social Change in the Industrial Revolution: An Application of Theory to the British Cotton Industry*. Chicago: University of Chicago Press.
- 鈴木健之 (2018)「機能主義的伝統と歴史認識——パーソンズとアレクサンダーを中心として」、『社会学論叢』(日本大学社会学会)、(191): 31-45。
- 鈴木健之 (2019)「『ポスト・オバマ』の社会学——ジェフリー・アレクサンダーの『アメリカ大統領論』を中心として」、『社会学研究』(東北社会学研究会)、(103): 95-114。
- 鈴木健之 (2020a)「T・パーソンズ——主意主義と行為」、仲川秀樹編『社会学史入門——黎明期から現代的展開まで』(第8章)、ミネルヴァ書房。
- 鈴木健之 (2020b)「J・アレクサンダー——行為体系論の再構成」。仲川秀樹『社会学史入門——黎明期から現代的展開まで』(第16章)、ミネルヴァ書房。
- 鈴木健之 (2020c)「社会的行為論の構造——理論と社会の相対化」、中村文哉・鈴木健之編『行為論からみる社会学——危機の時代への問いかけ』(第4章)、晃洋書房。
- 高城和義 (1992)『パーソンズとアメリカ知識社会』岩波書店。
- 好井裕明 (2006)『「あたりまえ」を疑う社会学——質的調査のセンス』光文社新書。